

2012年11月15日

## 2012年度採択 研究の国際化推進プログラム 研究成果報告書

採択者 (研究代表者)	所属機関・職名：立命館大学・理工学部・環境システム工学科・教授 氏名：岡本享久
研究課題	日韓中・環境マテリアルシンポジウム<立命館大学&青島農業大学&日本材料学会>

**I. 国際的研究成果発信の目的・意義の概要**

今次の国際的研究成果発信の目的・意義について、概要を記入してください。

立命館大学、青島農業大学(中国・山東省・青島市)および日本材料学会・コンクリート混和材料委員会(河野委員長(京大)、岡本幹事長(立命大))、さらには麻生ラファージュセメント(韓日・セメント環境ビジネス担当者)、の日韓中 4機関が集まり、環境材料系および環境システム力学系に関する学術講演会を実施した。即ち、現役の学部生・院生の育成、相互間の意見交換などを通じ、日韓中関係の強化、さらにはグローバルな感覚を有する人材育成を図る。

今回の研究代表者(岡本享久)は、理工学部環境システム工学科・環境マテリアル研究室の責任者で、環境材料、構造力学を専門とし、新材料・新工法、新規用途分野を対象とする研究を進めている。2012年11月現在、研究室の構成員は修士課程(M1・M2)12名(うちインドネシアから留学生1名)、卒研生10名、客員教授5名である。研究分担者(全 洪珠、顧 軍)は青島農業大学・建筑工程学院・環境副産物関係研究室の責任者で、石炭灰(フライッシュ)、再生骨材の有効利用、特にコンクリートへの実用的な適用を中心に国際的にも活躍している。日本材料学会・コンクリート混和材料委員会は京都に本部を置き、産業副産物(石炭灰、高炉スラグ微粉末など)の有効利用に活躍しているグループである。なお、予定した研究分担者の啓明大・李 承漢氏は、急遽中途入試対応・責任者となり、欠席となった。

**II. 国際的研究成果発信の成果と今後の展開計画の概要**

今次の国際的研究成果発信で得られた成果と今後の展開計画について、概要を記入してください。

開催日時は2012年11月9日(金)の13時開始であり、シンポジウム場所は、立命館大学・びわこ・くさつキャンパス・エポック棟・1階「大ホール」である。

プログラムと講演者は、以下の通りであり、使用言語は「英語」であった。司会は、市丸園子(立命大・環境マテリアル研究室・修士1回生)と岡本享久(立命館大学・理工学部・教授)、開会挨拶は神子直之(立命大・理工学部・教授・国際担当)に始まり、①京大・河野広隆教授「材料学会・コンクリート混和材料委員会の活動」、②青島農業大学・全洪珠副教授「中国における再生骨材の有効利用の現状および基準化」、③東京工業大学・坂井悦郎教授「低炭素排出型セメントの開発」、④青島農業大学・嵩英雄客員教授「コンクリートの高温劣化について」、⑤立命館大・M2加藤慎介「阪神大震災におけるねじりの影響の再考」、立命館大学、⑥M2市丸園子「植物の自生力に配慮した新規ポーラスコンクリート」、⑦立命大・児島孝之特命教授「コンクリート、クッキングと断食」、⑧特別講演：Chong-Hwa PARK「日韓・実ビジネスにおける環境貢献」を終え、閉会挨拶・講評を河野広隆教授が行い、シンポジウムを閉じた。

聴講者は、青島農業大学から全准教授、顧学科長、麻生ラファージュから朴取締役、日本材料学会・コンクリート混和材料委員会から河野委員長以下15名、大阪大・神戸大から教員2名、立命館大学・理工学部から神子教授、川崎助教をはじめ、環境システム工学科・環境マテリアル研究室から教員1名、職員1名、修士学生11名、卒論生10名、都市システム工学科・RC構造研から卒論生4名、環境システム工学科から2回生、3回生、4回生が46名、院生(環境マテリアル研究室以外)から19名、以上総計114名の参加者があった。

これらの成果は、会議時の配布した「Proceeding」と同時に、日本材料学会誌「材料」へ委員会活動報告・投稿、2013年9月「The 8th International Symposium on Cement & Concrete (ISCC2013)」南京にて、公表する。

※ I. 国際的研究成果発信の目的・意義の概要およびII. 国際的研究成果発信の成果と今後の展開計画の概要は、ホームページ等にて公開いたします。1ページに収めてください。